

ユースシンポジウム2012 若者と共に生き方をデザインする

ねっとわーく
新大宮みんなの基地

7 やったぞ！畑のイレブン

10 本格始動！地域若者サポーター

12 青少年活動センターのページ

ユースサービスと子ども・若者支援室

14 ユースかわら版

映像で「京都賞」受賞！ほか



精神保健福祉士
知名純子

思春期への共感

「何を考えているのか分からない…」 「気持ちが全く理解できない」。これは思春期専門相談を担当していたときに、お母さん方が我が子について口々におっしゃっていた言葉です。相談に来られるのは、子の不登校や反抗期等に悩むお母さん方がほとんどでしたが、私自身が若かったこともあって「どうして自分の子どもの気持ちがわからないのだろう」と不思議に感じていました。お母さん方にも思春期の頃があったはずなのに、あのしんどさを忘れてしまったのだろうか？ と。

思春期独特の漠然とした不安や焦燥感、イライラ。自立したいのに出来ないもどかしい気持ち、同級生への劣等感や嫉妬の感情…。問題行動を起こしているようで、その実本人が一番悩んでいるのです。私がおさんの気持ちを代弁すると、お母さん方は「なぜ私の子どもの気持ちがそんなにわかるのですか?!」と驚かれていましたが、当時は私もまだ20代で思春期の中に居たので、お母さん方より子どもの気持ちにより共感できたのでしょう。でも、この体験から「この先もずっと、悩み多き思春期のモヤモヤした気持ちを忘れない大人になろう」と強く感じたのを覚えています。

協会の企画委員をさせていただいている今、「もし私が学生の立場だったら、どんな企画を望むだろうか」と想像しながら会議に参加しています。そして、たくさんの思いを抱えながら、それでも頑張っているあなたを応援するために、大人の私達に何ができるだろうか」と委員の仲間と考えているところです。

(京都市ユースサービス協会 企画委員)

[表紙の花]——
ボケ(木瓜)……バラ科の落葉低木。庭木として親しまれる。実が瓜に似ており、木になる瓜で「木瓜(もけ)」から「ぼけ」に転訛したとも言われる。原産地：中国大陸。



若者とつくる地域仕事学び

ユースシンポジウム2012 「若者と共に生き方をデザインする」

山科青少年活動センター ユースワーカー 上原裕介

今回で13回目となる「ユースシンポジウム2012」は、

さる12月1日、中京青少年活動センターで

「若者と共に生き方をデザインする」をメインテーマに開催しました。

これは、子ども・若者育成支援推進法の施行に伴い
取り組みが進められてきた

子ども・若者総合支援事業の蓄積も踏まえ、
ネットワーク型支援の構築を意識した内容になりました。

基調講演

佐藤 洋作さん

(NPO 法人文化学習協同ネットワーク代表理事)

パネリスト

中西 新太郎さん

(横浜市立大学国際文化学部教授)

竹内 弘行さん

(NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡
副理事長)

梅原 美野さん

(NPO 法人山科醍醐こどもひろば)



集まったおよそ80人の参加者を前に、京都市子ども・若者支援地域協議会を代表して京都市子育て支援政策監の久保宏氏が「若者支援の取り組みの交流を」と開会挨拶をしました。

基調講演では佐藤洋作氏が「若者の立場に立つて支援を行うということは」と切り出し、現代の若者を取り巻く社会的状況について問題提起しました。若者の雇用問題の背景には、雇用の流動化政策の影響や、いわゆる「ブラック企業」のような過酷な働き方などの問題があると指摘し、若者は「働かない」のではなく「働けない」のだと訴えました。さらに社会の評価的まなざしや他者との応答関係・承認の欠如にさらされ、先行きの希望が見えなくなってしまう若者たちにとって、ベースキャンプとしての居場所がもっとも重要であると強調しました。

これを受けたパネルディスカッションでは、まず中西新太郎氏が、厳しい自己分析とアグレッシブなテンションで就職活動を勝ち抜いた先にある「フツー」の生き方も、いま大変な状況に置かれていると紹介しました。そして、それでもこの社会で生き抜いていかなければならない若者たちのサバイバルな現実に向き合い、粘り強く支援していくことが必要だと指摘しました。竹内弘行氏は、同じ地域で生活する市民サポーターがマンツーマンで若者を盛り立て、8割の就職率を達成している「静岡方式」を紹介し、専門機関で構成されたネットワークだけでなく「地域のお節介焼き」の力を活かすことも大切だと話しました。梅原美野氏は、貧困や虐待など深刻な状態にある子どもたちが、親の生き方を引き継いでいくことしか選べない状況にあること

を指摘し、生き方のモデルとなり得る者との出会いや共感が育まれる場の必要性を強調しました。また、立場から、就職活動の経験やNPOで働くことと思うに至った心情も語ってくれました。その後は、ネットワーク型支援の具体的なあり方について話題が及び、若者が支援機関にたどり着くには学校との連携や、自治体による情報の周知や、若者支援業界全体の底上げが必要だという議論がなされました。最後に中西氏が、若者に社会的コストをかけて公的支援を充実させることに対する説明やその意味についてしっかりと発信していくことの重要性を指摘し、第1部は終了しました。

ユースシンポジウム 「若者と共に生き方をデザインする」分科会

分科会A ながりの中に生きる若者生き方デザイン

パネリスト

- 中西新太郎さん (横浜市立大学教授)
- 熊澤真理さん (京都若者サポートステーション)
- 岡本美香さん (学習障がいをもちながら社会と向き合っている若者)
- 鈴木俊樹さん (京都府立鳥羽高校定時制卒業・現在プログラマーを目指している職業訓練校生)

パネリストの若者から、人とつながったことで、進路を切り開くチャンスを得た経験が話されました。参加者からはチャンスを受身的に待つのは不安や恐怖を感じるという声が出されました。自分から話しかける勇氣、自分が変わるタイミングやチャンスは誰にでもあるので、見逃さないようにする準備をしておくことが大切なのではないかと話し合われました。

(南青少年活動センター 品田真孝)



分科会B 10代の生きのび方ー大人への移行期時代をふり返ってー

コーディネーター

二井弘泰さん

(京都府立朱雀高校教員)

ゲストスピーカー

- 河原林孝輔さん
- 池島愛子さん
- 吉田真理さん (各京都府立高校卒業生)

20代の若者3人が自身の10代をふり返り、大人への移行に必要な支援のあり方を考えました。不登校からの回復や、親兄弟の不安定な家族関係の中で健康的な力を蓄えた過程、障がいの当事者の生き方など。その中で「不登校時代のことを語っても一生背負って生きていくとも思わない」と語り、それが生きていく力なのだと感じることができました。

(山科青少年活動センター 玉村 文)



分科会C 能力ある生き方ー分岐点で出会ったものー

コーディネーター

砂連尾理さん (振付家・ダンサー)

ゲストスピーカー

- 川崎歩さん (振付家・映像作家・ダンサー)
- 東好美さん (造形作家)
- 河瀬仁誌さん (劇団INION代表・脚本家・演出家・演劇WSフアシリテーター)

アーティストとして活躍しているゲスト3人のトークセッション。葛藤や壁を乗り越えてきた「原動力」ーアーティストが分岐点を迎えた時に感じた「フツ」ーに対する違和感や「好きなこと」に対する想い。それらを繋いでゆくゲスト3人の生き方からは、自分を見つめ、身体を整え、自分らしい豊かさを育んでいく力強さを感じられました。

(東山青少年活動センター 酒井彩乃)



分科会D いろんな生き方も“あり”です

フアシリテーター兼パネリスト

嘉村賢州さん (NPO法人場とつながりJones代表理事)

パネリスト

- 木村響子さん (株式会社基地計画 代表取締役社長)
- 吉田美奈子さん (まなびoカフェ 主宰)
- 田村篤史さん (キャリアデザイナー)

パネリストの4人は模索の果てに「わが道」を歩んでいる方々です。自らが居心地よく、創造的な「コミュニティ」を開拓し、かつ生計をたてていくためには何よりも行動力！と説かれました。参加者16人は就活中の若者から年配の方まで幅広く、大変刺激を受けたようです。考える素材が提供できたと思います。

(伏見青少年活動センター 岡本昌也)



5つの分科会とも今の若者に関心の深いテーマでしたが、参加者の多かった分科会Dに飛び込みました。最初にパネリスト4人それぞれの「生き方」が紹介されました。その中で、一度は会社員として就職あるいは内定していたが、現在は起業したり、フリーで活動している点。また、人と人が繋がるコミュニティ作りをしている点も4人の共通点でした。

紹介後はパネリストごとのテーブルに参加者が分かれて座り、さらにワールドカフェ方式でテーブルを移動。それぞれのテーブルで話したことを共有し、語り合いました。中では、今の若者は特に働き方において生き難いのではないかと。どういった働き方、生き方をすればいいのか。またコミュニティを持つと生き易さに繋がるのか。繋がりをもつことでどうしていくか議論されました。

最後のパネリストによるトークでは、コミュニティを作ることよりも継続することの難しさ、人と繋がるためにまずは口に出していくことなどの意見が出されました。フアシリテーター兼パネリストの嘉村賢州さんは「給料制じゃないので、仕事をどんどん入れてしまうんです。好きなのに仕事に追われてしまっている。会社で働くこととどっちが正しくて正しくないというところではないです。今の働き方で安定した休みや給料を生むことができたらいいなと思っています。模索しながら、社会にも提案できたらいいなと思います」とNPO法人代表理事としての働き方について、現状と展望を話されました。

会社員、主婦、家族がひきこもり、学生……などさまざまなバックグラウンドをもつ参加者たちは、生き方のヒントや自分が大切にしていることを考えるきっかけの時間となったでしょう。パネリストもまた、新しい気付きを得ることができたのではないのでしょうか。

(京都若者サポートステーション 富田祐子)

分科会E 若者の生き方と支援のあり方

パネリスト

- 竹内弘行さん (NPO法人青少年就労支援ネットワーク 静岡副理事長)
- 梅林秀行さん (NPO法人京都ARU理事/事務局長)
- 河田桂子さん (NPO法人若者と家族のライフプランを考える会 理事長)

若者と支援者がともに「若者の生き方」と「支援」のあり方を考えました。各パネリストが入った小グループ討議では、若者の立場から、家族の立場から、支援者の立場から、それぞれ「将来に向けての不安感」「家族以外の誰かの力」「みんなに居場所と出番を」「自己分析は就活のときのみ必要なのか」などの意見交換がされました。

(子ども・若者支援室 竹久輝頭)



若者と共に 生き方をデザインする (基調講演より)

佐藤洋作 (NPO 法人文化学習協同ネットワーク代表理事)

1 自己責任イデオロギーが 若者を 立ちすくませている

不登校や中退、あるいは学業不振など「教育からの排除」のプロセスは、若者たちの内面に「仕事からの排除」を自由な競争の結果として受け止める心情（自己責任イデオロギー）が醸成されており、それが若者たちを立ちすくませている。立ちすくみは意欲の問題ではない。若者は「働かない」のではなく「働けない」のである。また雇用状況の悪化で経済的、客観的条件によって「働けない」状況が生まれてきており、経済的貧困が精神の貧困を生み出し、精神の貧困が経済的貧困を増幅させていくという悪循環が生まれている。

2 居場所をベースキャンプ とした学び直し

「居場所」は、競争的な他者関係を共感的・共生的なものへと組

み替えながら内なる自己責任論を溶かし、社会に参加するうえで他者や、さらには自分自身への基本的信頼を回復していく学び合いの場である。若者たちは仲間と共にパン屋の実践共同体に参加しながら、語り合い、出会い、向き合いながら失われた青年期を取り戻していく。

若者は自分も参加する場（関係）からの承認によって社会への信頼を、そして自分自身への信頼を回復していくことを通して、生きて働いていくことの方向感覚のようなものを獲得していく。

3 若者とつくる 地域、仕事、学び

若者が社会（仕事）へと近づいていくためには、地域ニーズに対応した生産やサービス活動に従事し、人々に感謝されることによって自己の有用性を自覚できる機会が必要である。若者は地域のさま

ざまな人々と協働的関係をむすびながらつくりあげる生活そのものに導かれ、自らを育て上げる学習主体になっていくことができる。

4 若者のだれもが 人間らしく生き、 働くことのできる、 社会づくりの主体に

若者を社会（仕事）へとつなぐためには、その移行そのものではなく、職業訓練や仕事探しの過程そのものを協働の営みとして乗り切っていく機会を提供しなければならぬ。若者自立支援とは、個々の若者に既存の社会への一方的な適応を迫る支援ではなく、だれもが人間らしく生き働くことができ、その形成主体へと成長していくための教育的、福祉的なサポートに他ならない。



■ プロフィール

1947年島根県生まれ。
学生時代から子どもたちの学習支援にかかわる。
90年代に不登校の子供のための居場所づくりを進める。
2000年に入り、国の若者の支援政策にも参加。
著書「居場所づくりの原動力」「ニート・フリーターと学力」他多数。